

研究テーマを選ぶときに考えることはまず第一に、自分にとって(1)「面白いあるいは面白そうか」どうかだろうと思います。それと共に考えることは、(2)「インパクトある研究、あるいは価値ある研究か」という観点かだと思います。(1)の点は立ち入らないことにし、(2)の点について感じることを記してみます。

大学院頃に自分で考えて研究を始めるときに、多くの人が目標とするのは学術論文誌、トップ国際会議の論文になる研究をすることでしょうか。特に学術的に有意な成果は論文となることにより、その分野の後の発展に貢献することになります。インパクトや価値で本来目標とすべきは、使われて社会や生活の進歩、改革に寄与するようなレベルです。論文的価値がこのような社会的価値やインパクトに繋がれば理想で幸せなのですが、必ずしもそうでないところが悩ましいです。大学関係では論文は業績の指標として大事で、無視できません。しかし、論文を目標に研究すると、無駄とは言えないが社会的価値とはズレたものになってしまうことがあります。

ソフトの比重が大きい情報技術分野は、使われて広まることによって評価が上がり、大きなインパクトを持つことが多いです。シニア世代が経験した1980年代からバブル期では、目新しいアイデアの研究を発表すると、成長期にある企業が注目し、実用化が図られるといったことが多々ありました。しかし、日本経済が停滞期に入った後は、具体的ニーズ(あるいは潜在的ニーズ)に面と向かい使える形態の技術にまでしないと、社会で使われないというようになってきたと感じます。

1996年からの科学技術基本計画で、当初は情報通信分野は4本柱の1つに指定され支援があつたりして、一流の域に達しているのはなお少数という課題は残りますが、情報の学術研究はますますのレベルになってきていると思えます(論文数で中国に抜かれています)。

石塚 満 Mitsuru ISHIZUKA
(東京大学)

[正会員] ishizuka.mi@gmail.com

1971年東大・工・電子卒業、博士修了後、NTT横須賀研究所、東大・生研を経て、1992年東大・工・電子情報・教授、2001年から情報理工学系研究科。専門は知能情報学。人工知能学会元会長。

これに対し、ITが急進したこの間、日本でグローバルに競争力を持つ情報技術が育ってきたかを見ると、忸怩たる思いです。急発展したGoogleやFacebookのような事例を見ると、強いサービスを推進エンジンとし、次の新情報技術、サービスのフロンティアを切り拓いて力強さがあります。社会環境要因の差が大きいのは確かですが、社会的インパクトや価値を目指す(独自の革新性を持つ)研究の比率が十分でなかったことも大きいように思われます。成功確率は小さいので、信念を持って行ってもうまく行くとは限らないですが、挑戦数を増やさないことには成功は生まれません。論文数は心配ないという能力ある人には、大きな社会的イン

応
般

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.28]

インパクトある研究

パクトに挑戦してもらう必要があります。

このようなビジネス戦略のことは経営陣の役割という考えもあるかと思えます。しかし、研究者からの独自のアイデアと具体的な技術を出さないと、経営陣は世の中のトレンドで判断することになり、社会的インパクトのある強い技術、サービスを考えられなくなっていると思われれます。国レベルの研究支援、産業育成戦略立案でも同様で、産業競争力のある情報技術を育てようという意図はありますが、具体的な良い芽が見えないとコンセンサスが取りやすい世界のトレンドに沿うテーマ設定になることが多いようです。

日本にも外資企業が多数あり、今では日本発とか国産技術とか言う必要はないとも考えられます。しかし、ほかと結び付けて新たな価値を生み出す上で、コントロール可能な自前の技術を持つことは、なお必要なようです。

以上は、大学に所属する者の視点で述べており、企業では違うと言う方も多いと思います。また、自分でできなかったことを言っているとされるとその通りですが、若い方が「インパクトある研究」を考える参考になればと思います。

(2013年1月31日受付)